埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第28集

深谷市内遺跡 III

1991.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第28集

深谷市内遺跡 III

木の本古墳群第4号墳
上敷免遺跡（第7次）

1991.3

深谷市教育委員会

序

深谷市教育委員会は、個人専用住宅の建設に伴う発掘調査を、国及び県の補助金の交付を受けまして昭和59年度より継続的に実施しております。この調査も、はや７年度目を経過し、様々な成果を挙げることができましたが、こうした調査こそ正に市民の皆様の深い御理解と暖かい御協力なしには成り立ちえないものと痛感しております。

近年の経済・文化を含めた社会状況の急激な変革は、人々の郷土意識にも大きな変化を促していることは否めません。最近、深谷市も首都圏拡大化の影響を受け、急速に都市化が進行しておりますが、つい５年ほど前まではほとんど見られなかった高層住宅なども著しく増加し、都市としての性格そのものが変容せざるをえない状況となりつつあります。ともすれば郷土意識そのものが薄れかねない今こそ、様々な形で残された先人の遺産を敬い尊重し、さらにそこから郷土の姿を学び取っていくことが極めて重要なこととして、益々強く感じられてまいります。

私たちが生活する大地に眠る埋蔵文化財も、郷土を築いた先人の貴重な遺産であり、特に個人の住宅建設に伴って埋蔵文化財が次々と陽の目を見ることは、郷土の本来の姿を探求し、これからの郷土のありかたを考えるうえで、私には極めて象徴的なことのように思われます。決して目立たない事業ではありますが、郷土をより深く理解するための事業として、地道に努力を続けてまいる所存です。

平成２年度の当事業の報告書をまとめるにあたり、関係者の皆様に深く感謝申し上げ、郷土意識の興隆のためにも市民の皆様の当事業に対する変わらぬ御厚意を、よろしくお願い申し上げます。

平成３年３月

深谷市教育委員会

教育長　鳥　塚　恵和男

例　言

1．本書は、埼玉県深谷市内における、平成２年度の個人専用住宅建設に伴う遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査は深谷市教育委員会が主体となり、国庫補助金・県補助金の交付を受けて実施した。

3．本書に収録した発掘調査の、遺跡名・場所・面積・現地発掘期間は下記のとおりである。

木の本古墳群第４号墳・墳丘脇部

深谷市大字原郷1121番地１，２　約60㎡　平成２年５月７日～５月17日

上敷免遺跡第７次　深谷市大字明戸96番地１，２　約60㎡　平成２年６月25日～７月12日

4．本書の執筆・編集及び写真撮影は澤出晃越が行った。

5．出土品・図面及び写真は深谷市教育委員会が保管している。

発掘調査の組織

調査主体者　深谷市教育委員会　教育長　鳥塚恵和男

教育次長　永井新八

事　務　局　深谷市教育委員会社会教育課　課長　永井新八（兼務）

課長補佐　須長欣二

文化財保護係長　田中島功

庶務係長　金子信子

主任　関根広子

主事　古池晋禄

調査担当者　深谷市教育委員会社会教育課　主任　澤出晃越

調査参加者　相沢恵、浅野規子、宇賀地桂子、大原黎子、落合成子、加瀬律子、加藤佳子、神山智恵子、里山まり子、島津芳子、清水清子、鈴木令子、関口より子、関根仁子、高橋豊子、滝口知子、玉瀬静枝、千蔵フミヨ、友松扶慈子、西井れい子、土師澄子、湯沢直子、河合詔子、久米紀子、小沼和子、砂田伊久子、都築百合子、細川ケイ、水野祥代、本橋玲子、森光代、渡辺哲子、

野本昌寛、岩田靖宏、真柄裕一、鎌田宣之、斉藤尚人、高橋雅裕、秋吉正博、木村友哉、新井智恵、石本由布子（以上埼玉大学生）

目　　次

序
例言
目次
出土遺物観察表・凡例

Ⅰ．調査にあたって ……1

Ⅱ．深谷市の地理的環境 ……3

Ⅲ．木の本古墳群第４号墳・墳丘脇部の調査
　１．木の本古墳群第４号墳の環境……4
　２．調査の概要……4
　３．出土遺物……6

Ⅳ．上敷免遺跡第７次発掘調査
　１．上敷免遺跡の環境……8
　２．調査の概要……11
　３．遺構と出土遺物……12
　４．まとめ……28

写真図版

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図
第２図　木の本古墳群第４号墳周辺地形図
第３図　木の本古墳群第４号墳・墳丘脇部調査区全測図、出土遺物
第４図　上敷免第７次発掘調査区周辺地形図
第５図　上敷免第７次発掘調査区全測図
第６図　第１号住居跡実測図
第７図　第２号住宅跡実測図
第８図　第２号住居跡遺物出土状態
第９図　第３号・第４号住居跡、第３号土壙実測図
第10図　第５号住居跡、第５号土壙実測図
第11図　第１号住居跡出土遺物
第12図　第２号住居跡出土遺物(1)
第13図　第２号住居跡出土遺物(2)
第14図　第２号住居跡出土遺物(3)
第15図　第２号住居跡出土遺物(4)
第16図　第４号・第５号住居跡出土遺物ほか
第17図　出土古銭拓影

出土遺物観察表・凡例
（上敷免遺跡第７次発掘調査）

○第１号住居跡出土遺物（第11図１～19）　※全て土師器

番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　　徴	残存
2	坏	12.4	5.3		口唇部上面平坦で一部に沈線。器面軟質で少し摩滅内面は丁寧なナデで、体部内面にヘラ状工具の使用痕あり。体～底部の大半は黒斑。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。焼成やや不良、軽質。ＬＯ。	90%
16	大型坏	(16.0)	6.2		口唇部上面平坦で沈線あり。器面軟質で摩滅著しい胎土酸化鉄を多く含む。焼成やや不良、軽質。Ｏ～ＯＢ。	70%

出土した遺物は銅銭１点を除き全て土師器である。

番号は挿図の番号に一致する。

法量に関する（　）内の数値は推定値である。

特徴は、形態・技法などの特徴を記した。胎土は、黒色雲母粒子、不透明な白色の粒子、酸化鉄粒子を含むものを基本とし、基本的でないもののみ記した。

色調は下記のようにアルファベットで記した。

Ｌ：淡色　Ｄ：暗色　Ｂ１：黒色　Ｂ：褐色　Ｒ：赤色　Ｏ：橙色　Ｙ：黄色　Ｇ：灰色　Ｗ：白色

例　ＬＯＢ：淡橙褐色

Ⅰ．調査にあたって

深谷市は、東京都心から約74km、埼玉県北部に位置し、利根川を挾んで群馬県に接している。近代日本経済の礎を築いた偉人、渋沢栄一の生誕地として、また、深谷ネギの産地として知られている。古くは康正２年（1456）に山内上杉氏の一族である深谷上杉房憲が現在の市の中心部北側に深谷城を築いたといわれ、江戸時代には中山道の宿場町として発展した。現在、人口約94,000人、面積約69.4㎢で、農業粗生産高は県内市町村随一を誇り、商工業等の発展も著しく、急速に都市化が進行しており、市当局は市民生活と都市機能の調和のとれたまちづくりを推進している。

こうした状況にあって、開発事業は当然のごとく急増しており、埋蔵文化財に重大な影響を及ぼしている。市教育委員会は、埋蔵文化財保護の基礎資料を得るために、昭和56・57年度に市内全域の遺跡詳細分布調査を実施し、約250カ所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。その後の発掘調査成果の増加等により、現在では258カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。こうした調査成果をもとに、市教育委員会は埋蔵文化財保護に係わるさまざまな対策に取り組んでいるが、増加の一途を辿る開発事業に対し、正に課題山積みの状態である。

最近では、市の都市基盤整備の進展とともに、地価急騰などに伴う都心への通勤圏の急速な拡大が一層拍車をかけた形で住宅の急増が特に目立っている。健全な環境における住宅の増加は都市発展の基礎として望ましい状況ではあるが、一方埋蔵文化財包蔵地の蚕食状況も生み出されており、文化財保護行政上、住宅建設問題への対応は、文字通り日増しに大きな課題となっている。

こうした状況をふまえ市教育委員会は、日毎に失われていく埋蔵文化財を少しでも記録保存するために、昭和59年度より国庫補助金・県費補助金の交付を受けて、埋蔵文化財包蔵地内の個人専用住宅建設予定地の発掘調査を実施している。平成２年度に実施した個人専用住宅建設予定地の発掘調査は下記の２カ所である。

なお、個人専用住宅の建設予定の確認は、市都市計画課の協力により建築確認申請によておこなっており、さらに当該地の埋蔵文化財確認調査を実施したうえで発掘調査対象地を決定している。

○No.019 遺跡（木の本古墳群第４号墳）墳丘脇部

深谷市大字原郷1121番地１，２　約60㎡　平成２年５月７日～５月17日

○No.006遺跡（上敷免遺跡）第７次

深谷市大字明戸96番地１，２　約60㎡　平成２年６月25日～７月12日

1．上敷免遺跡　2．上敷免北遺跡　3．本郷前東遺跡　4．新屋敷東遺跡　5．新田裏遺跡　6．明戸東遺跡
7．原遺跡　8．宮ヶ谷戸遺跡　9．東川端遺跡　10．楡山神社　11．木の本古墳群第４号墳　12．深谷城跡
13．庁鼻和城跡　14．割山埴輪窯跡

第１図　遺跡位置図（１／40,000）

Ⅱ．深谷市の地理的環境

深谷市の周辺は、市の中心部をほぼ東西に通るＪＲ高崎線付近を境として、南側の櫛挽台地と北側の妻沼低地から成り立っている。櫛挽台地は、荒川の作用により形成された寄居付近を頂部として北へ広がる扇状地性の洪積台地である。妻沼低地は、利根川の作用により形成された沖積低地である。

櫛挽台地は乾燥した台地であり、しばしばひどい土埃に悩まされることがある。養蚕が盛んで桑畑が広がっているが、近年はむしろ花や植木などの栽培が盛んになっている。台地北端部のＪＲ高崎線深谷駅から徒歩20～30分圏内は住宅等が急増しており、最近では特にマンションなどの集合住宅の建設が目立って増えている。構造的には、西北側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、東南側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼＪＲ高崎線沿いの崖線で比高５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線から北へ1.5～1.8kmほど延びており、比高２～５ｍをもつて妻沼低地と接している。接線付近のそれぞれの標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は、標高約70m付近から発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川などが北へ流れており、最近の発掘調査では埋没谷が数カ所発見され、櫛挽台地北端部は、南北に台地を開析する浅い谷が発達していたものと考えられる。寄居面にはこうした谷筋などはほとんど認められず、妻沼低地と接する台地最末端部を除き、水利上は居住には不適だったものと考えられる。

なお、櫛挽面の西には、岡部町山崎山などを含む松久丘陵を挟んで立川面に比定される本庄台地が広がっており、寄居面の南には、荒川を挟んで下末吉面に比定される江南台地が東西に延びている。櫛挽面の北東端近くには、第三紀層から成る残丘、標高約98.0mの仙元山があり、熊谷市内の寄居面東端にも同様の残丘、標高約77.4mの観音山がある。また、台地北端部の櫛挽面と寄居面の境界付近で、活断層（深谷断層）が確認されている。

妻沼低地は、利根川右岸の広大肥沃な低地である。水田が広がっているが、ねぎやほうれん草、やまといもなどの主生産地でもある。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵・台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に続く。妻沼低地の南端、南に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部市街地があり、周辺では住宅等が急増している。妻沼低地は現在はかなり平坦な状況であるが、利根川の流路の変遷や氾濫等により、自然堤防が発達していたものと推定される。渋沢栄一の生誕地である血洗島をはじめ、矢島、大塚島、内ヶ島などのように島のつく地名が多いこともこのことを裏付けている。

なお、最近の妻沼低地内の発掘調査では、過去における大地震の痕跡とされる噴砂現象がしばしば確認されている。平成元年度の一般国道17号線上武バイパス建設工事に伴う居立遺跡発掘調査で、埼玉大学堀口万吉教授と埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、この噴砂現象をもたらした大地震は９～10世紀に起こったとする見解を発表している。

Ⅲ．木の本古墳群第４号墳・墳丘脇部の調査

１．木の本古墳群第４号墳の環境

木の本古墳群は、ＪＲ高崎線深谷駅の東北方向、櫛挽台地寄居末端部上に点在する二十数基の小古墳から成る古墳群で、埼玉県の重要遺跡に選定されている。もともとは相当な数の古墳があったらしいが、戦後の開発によりほとんどが削平されてしまったようである。現在残っているのは径10～30mほどの円墳のみであり（８号墳は前方後円墳とされるが、筆者の調べでは隣接する東方城跡の土塁の痕跡と思われる）、西はＪＲ高崎線深谷駅の北北東約１㎞の瑠璃光寺付近から東は熊谷市境付近まで、延長約２㎞の範囲にわたっている。この古墳群の築造時期は、正式な発掘調査例がないので詳細は不明であるが、周辺に散布している埴輪の破片などを調べたかぎりでは６世紀中葉以降と考えられる。ちなみに昭和44年刊行の「深谷市史」によれば、昭和25年１月4 日に幡羅地区城西にある火の見塚が家屋新築により半壊され、石槨が発見されるとともにほぼ完全な形態の頭骨が出土した。現在墳丘は半壊のまま残っており、頭骨は東京大学に保管されている。昭和30年５月に幡羅八幡塚古墳が農地整理のために破壊されたときにも人骨が出土した。また、瑠璃光寺には付近の古墳から出土したとされる勾玉や金環が保管されている。

さて、木の本古墳群の周辺を見ると、古墳時代後期から平安時代の大集落跡が広がっているものと推定されるが、特に古墳群の範囲の西端にある楡山神社と東端の熊谷市側にある西別府廃寺跡及び西別府祭祀遺跡（湯殿神社裏遺跡）が注目されよう。楡山神社は延喜式内社とされる古社で、木の本古墳群がある幡羅郡の総鎮守である。西別府廃寺跡は８～９世紀の遺跡で、最近の熊谷市教育委員会の発掘調査などにより、郡寺にも比定しうるほどの規模と内容をもつことが明らかになりつつある。西別府祭祀遺跡は７世紀末～９世紀頃の遺跡である。

また、最近になって近隣に他の古墳群が発見されている。昭和63年度の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査により木の本古墳群の北約１㎞に、現在墳丘は全く残されていないが、木の本古墳群とほぼ同時期、６世紀中葉～７世紀初頭頃の小円墳群と考えられる上増田古墳群が確認された。また、木の本古墳群東端部の南東約1.5㎞、ＪＲ高崎線篭原駅の北側で、区画整理事業に伴う熊谷市教育委員会の発掘調査により終末期の古墳群が発見され、極めて珍しい８角形の墳丘をもつ古墳が含まれていることが発見されて注目を集めた。

なお、ＪＲ高崎線深谷駅の南約800m、櫛挽台地櫛挽面末端部に割山埴輪窯跡があることも記しておきたい。この埴輪窯跡で製作された埴輪の供給状況などは、今のところ明らかではない。

２．調査の概要

木の本古墳群第４号墳は、古墳群範囲のほぼ中央部、深谷市原郷1121番地にある。直径約10mの小円墳で、ほかの11基の古墳とともに深谷市の史跡に指定されている。

第２図　木の本古墳群第４号墳周辺地形図（１／5,000）

調査は、個人の専用住宅建設工事に伴い、墳丘のすぐ北脇の部分、深谷市原郷1121番地の約60㎡について行った。なお、事前に工事にあたってはくれぐれも墳丘に影響のないように要請した。また、当初予定していた部分のうち西半分は撹乱が激しく、調査対象とはならなかった。

現地の発掘調査は平成2年5月7日～5月17日に実施した。周溝などの古墳に関係する遺構は全く検出されず、埴輪等も出土しなかった。版築の痕跡等も確認できなかった。調査範囲の東端に南北方向の溝跡（第1号溝跡）が検出されたが、規模等は不明であり、出土遺物等からその構築時期は18世紀を遡らないものと思われる。

古墳に関連した遺構等が発見されなかった理由としては、次のようなことが考えられよう。

○今見られる墳丘は墳頂の稲荷神社を残して既に周囲がかなり削られたものであって、周溝は今回の調査範囲よりも外側にある（現在残っている墳丘は径約10mと極めて小さく、平面形もややいびつである）

○周溝や埴輪を持たない古墳である

○木の本古墳群第4号墳は実際には古墳ではなく、中世または近世の塚である。

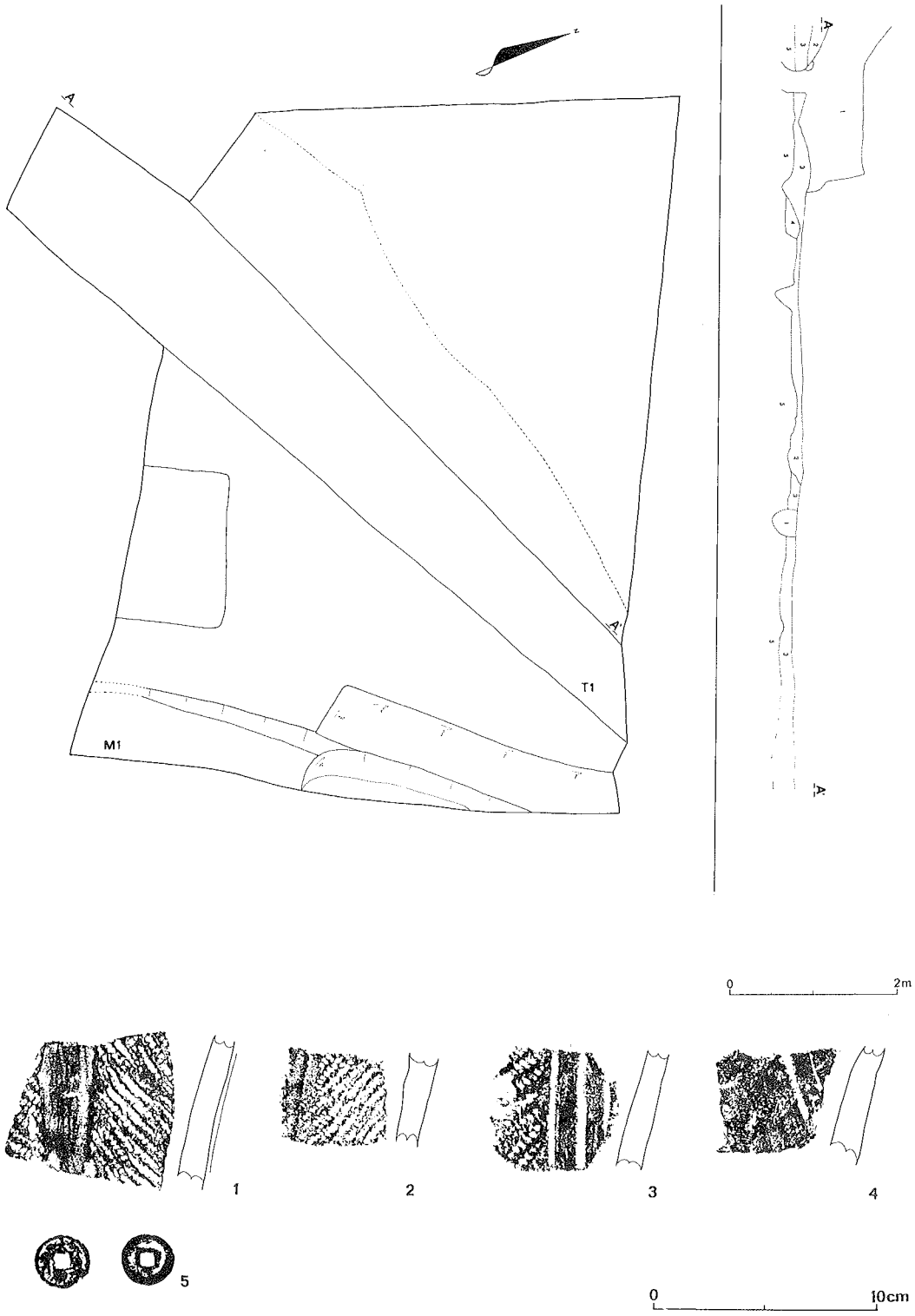
今回の調査では上記の内容について確認することはできなかったため、結論は今後の調査に委ねたい。

なお、以上のような状態であったため、出土遺物は表土層の中からの古銭や縄文土器片、第1号溝跡の覆土中からの土器片・陶器片などのみである。

3．出土遺物（第3図1～5）

1～4は縄文土器片である。1はＬＲ単節の縄文を地文とし、磨消帯が垂下している。磨消帯の両脇は隆線状。内面は丁寧にナデられている。2はＲＬ単節の縄文を地文とし、沈線が垂下している。3はＲＬ単節の縄文を地文とし、平行沈線と磨消帯が垂下している。沈線は3条認められる。4は垂下する沈線があるもの。

5は銅銭である。大観通宝、真書体、北宋銭である。初鋳は1107年。腐食が激しい。



第３図　木の本古墳群第４号墳丘脇部調査区全測図（1／120）・出土遺物（１／３）

Ⅳ．上敷免遺跡第７次発掘調査

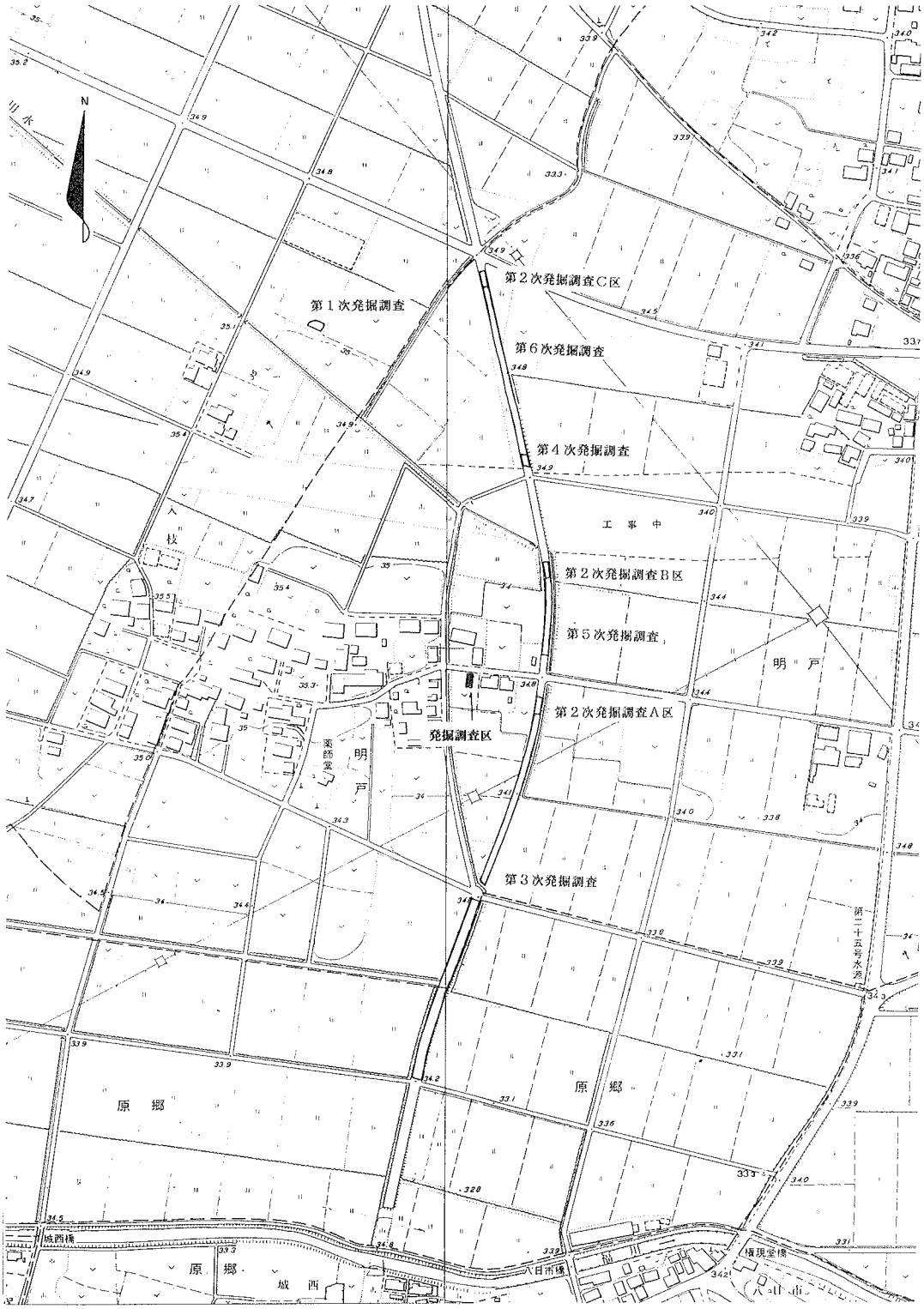
１．遺跡の地理的・歴史的環境

上敷免遺跡は、ＪＲ高崎線深谷駅の北北東約2.5kmにある。南北約500ｍ、東西約1,000ｍに及ぶ広大な遺跡である。時代や立地状況等によりいくつかに分けて考えられる遺跡の集合体である可能性が高いが、その詳細は今のところ不明である。

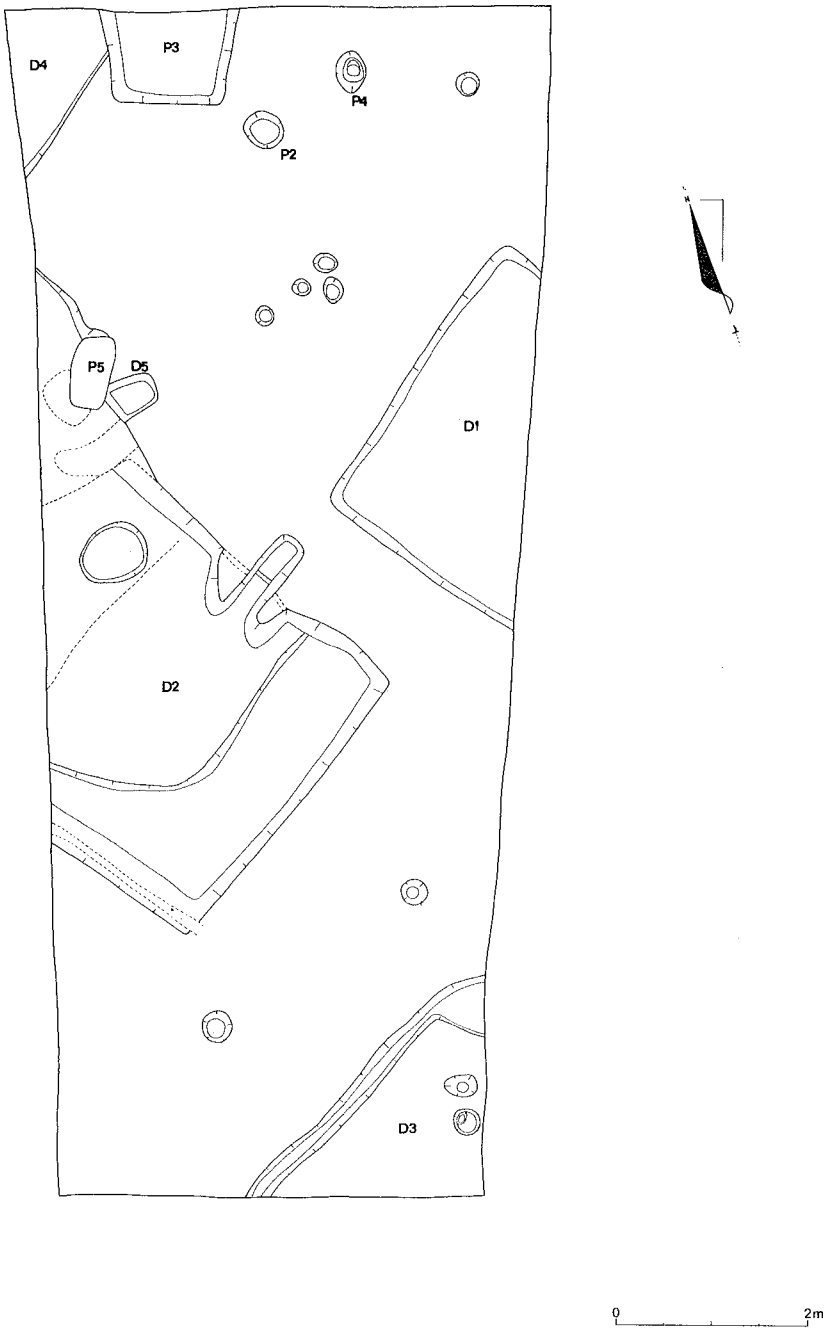
上敷免遺跡がある深谷市の北半部一帯は本庄市・岡部町から深谷市を経て熊谷市・妻沼町へ続く平坦な広い妻沼低地であり、上敷免遺跡での標高は33～34ｍである。妻沼低地内は、現在では、地場産業である瓦や土管、煉瓦等の原土採取や土地改良などによりかなりの部分が水田化されており、旧状を把握することは困難である。しかし、昭和57年度の深谷市教育委員会による深谷市遺跡詳細分布調査により、利根川に平行するように東西に、主に古墳時代以降の遺跡が血洗島・矢島・大塚島・内ヶ島などの島のつく地名の土地を包括して連続している（上敷免遺跡も含まれる）ことが確認された。また、この遺跡帯上に国道17号線深谷バイパスの建設に伴う財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査により、この遺跡帯の内容は、一層綿密に明らかになりつつある。こうした状況は、現在では必ずしも明確ではない自然堤防の発達状況を、遺跡が逆によく示したものといえよう。

さて、上敷免遺跡は、昭和52年の発掘調査でのいわゆる須和田式の壷を伴う弥生時代中期の再葬墓の発見により広くその名を知られることになり、現在では埼玉県の重要遺跡に選定されている。その後、昭和57年度に公共下水道工事に伴う第２次発掘調査、昭和62～63年度に遊歩道建設工事に伴う第３次～第６次発掘調査が実施され（調査主体は深谷市教育委員会）、古墳時代後期～平安時代の大集落跡であることが明らかになるとともに、年代の相違や埋没谷などの立地条件などにより細かいグルーピングが可能であることも判明しつつある。なお、上敷免遺跡の北には、埋没谷を挟んでやはり広大な範囲に及ぶ上敷免北遺跡があるが、４回にわたりごく狭い範囲の発掘調査が行われ、その限りでは年代的には上敷免遺跡に後出する10世紀頃の集落跡があることが確認されている。

古墳時代後期～平安時代の当地域を考察するうえで、上敷免遺跡などを望む台地末端上の木の本古墳群、上敷免遺跡の東約２kmにある上増田古墳群、延喜式内社とされる楡山神社などは忘れてはならないものである。とくに楡山神社は上敷免遺跡の南端部から300m余りしか離れていない櫛挽台地寄居面末端部に位置し、深い関連性が考えられる。当地域は古代における幡羅郡と榛沢郡の境界付近と推定され、楡山神社が幡羅郡の最西部にあたる。上敷免遺跡の一帯が両郡の何れに属するかは残念ながら不明である。江戸時代には上敷免村は榛沢郡に属していたが、それをもって古代の行政区画の根拠とすることはできまい。



第４図　上敷免遺跡第７次発掘調査区周辺地形図（１／5,000）



第５図　上敷免遺跡第７次発掘調査区全測図（１／80）

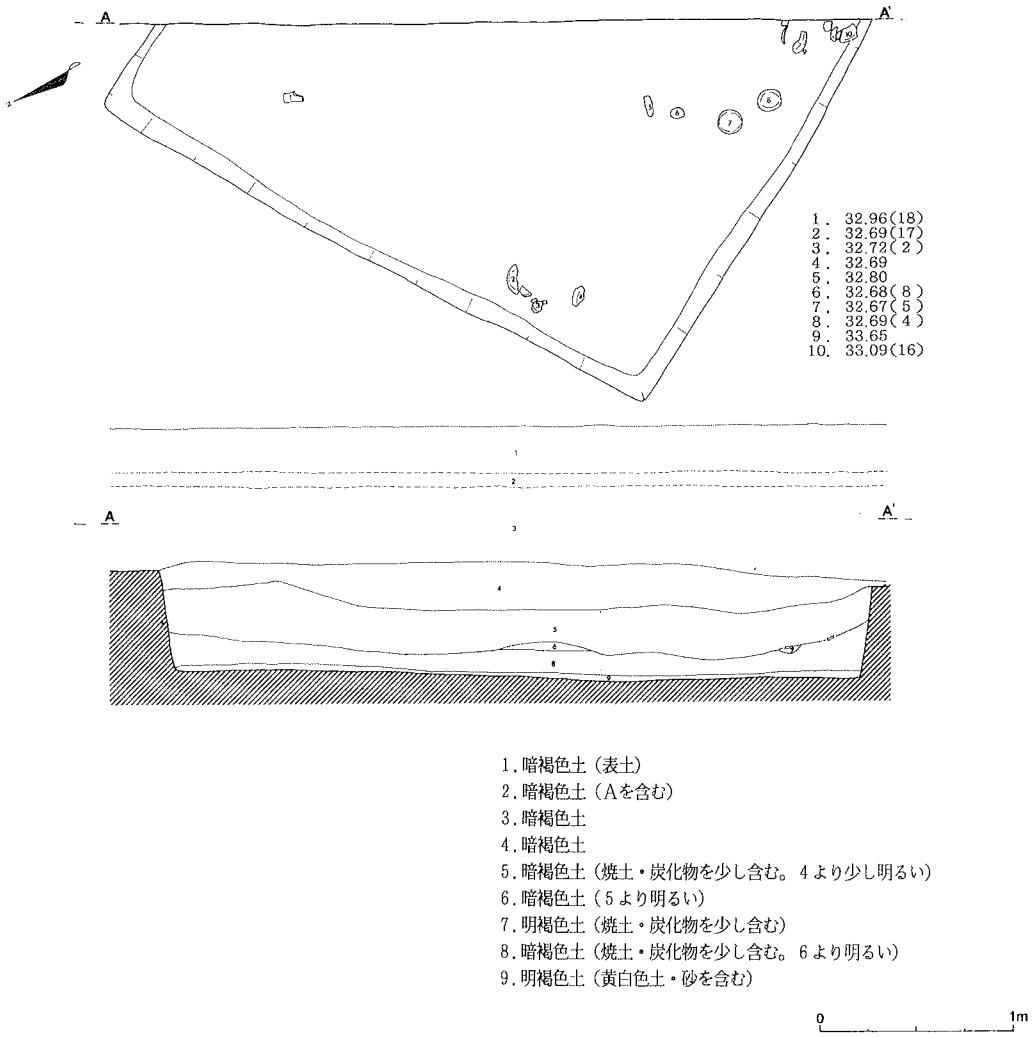
2．調査の概要

現地発掘調査は、平成２年６月25日から７月12日に実施した。周囲の水田の水位が高くなる時期にあたっていたため、調査期間の後半は遺構内の湧水に少し悩まされたが、概ね順調に進行した。

調査は、パワーショベルにより表土を除去して行った。グリッド杭等は特に設定しなかった。

調査対象面積は約60㎡と極めて狭かったが、住居跡５軒と土壙などが検出された。ただし、住居跡のうち、全体像がある程度確認しえたのは第２号住居跡のみであり、第３号・第４号の２軒の住居跡は住居跡とする根拠にはいささか欠けていることは否めない。

出土遺物はほとんど土師器ばかりであり、第２号住居跡からは比較的多く出土した。土師器以外では、第１号住居跡覆土上層から出土した古銭（皇宋通宝）がある。



第６図　第１号住居跡実測図（１／40）

3．遺構と出土遺物

○第１号住居跡（第６図）

調査区の東辺に位置し、全体の40％程度が調査しえたものと思われる。

確認できた西辺の長さは、3.2mで、平面プランは方形状を呈するものと考えられる。深さは現地表面から130～135cm、確認面から55～60cmで、床面は比較的平坦でしっかりしていた。柱穴や壁溝などは検出されなかった。

出土遺物は土師器坏や石錘などで、特に住居跡の南側から多く出土した。

○第２号住居跡（第７図）

調査区の中央に位置し、全体の80～90％が調査しえたものと思われる。北隅は５号住居跡を切っていた。

南西隅が調査区外であったが、主軸方向の長さは約3.5m、東辺の長さは約3.8mで、わずかに横長の長方形を呈する。なお、西辺に沿っていわゆる墳砂が確認された。カマド正面から中央部に黄白色粘土が厚さ２～３cmで敷かれて貼床状となっていた。西辺から南辺は５cmほど段差がついて下がっていたが、北側ははっきりしなかった。深さは、貼床部分で現地表面から約140cm、確認面から約40cmであった。

カマドは東辺中央よりやや南に構築され、両軸は50～60cmほど地山を削り出して作られていた。焚き口の幅は約40cmで、燃焼部火床面は浅く掘り込まれ、奥は壁状に立ち上がり、煙道部は壁から約60cm突出した部分まで確認された。燃焼部内からは支脚として利用されたと思われる伏せた状態の土師器高坏や、その上に正位の土師器甕などが出土した。カマド袖の外側の床面にも炭化物の薄い層が検出された。

カマドに向かって左から少し離れて円形のピットが検出された。径約0.7m、深さ約10cmと浅く土師器甑の破片が出土したが貯蔵穴かどうかは不明。柱穴は検出されなかった。

上記の他にも土師器甕・甑・高坏などが比較的多く出土したが、カマドとは対面の西辺側から多くが出土し、特にカマドの真向かいに坏が集中して検出された。

○第３号住居跡（第９図）

調査区の南東隅に位置する。ごく一部が確認されたのみであり、規模等は不明。深さは現地表面から約115cm、確認面から約15cmで、壁溝が確認された。北東側の床面は約５cm下がっていた。ピットは２基検出され、南側が径約30cm深さ約15cm、北側が35×25cm深さ約25cmであった。

土師器の小破片などが出土したが、図示しうるものはなかった。

○第４号住居跡（第９図）

調査区の北東隅に位置し、第３号土壙に切られていた。ごく一部が確認されたのみであり、実質的には住居跡とする根拠は検出されなかった。深さは現地表面から約80cm、確認面から約10cmで、底面

は平坦でしっかりしていた。

土師器の小破片などが出土したが、図示しうるものはなかった。

○第５号住居跡（第10図）

第２号住居跡の北側に位置する。カマドの部分が確認されたのみであり、第２号住居跡と第５号土壙に切られていたため、残存状態は良くなかった。燃焼部からは多量の焼土とともに土師器甕・高坏などが出土した。その両脇に、かなり崩れた状態ではあったが黄褐色土塊が検出され、袖の残骸と推定された。燃焼部の奥は壁状に立ち上がり、煙道部は壁から約50㎝突出していた。

○第２号土壙（第５図）

調査区の北端に位置する。0.45×0.5mのやや長円形を呈し、確認面からの深さは約25㎝であった。

○第３号土壙（第９図）

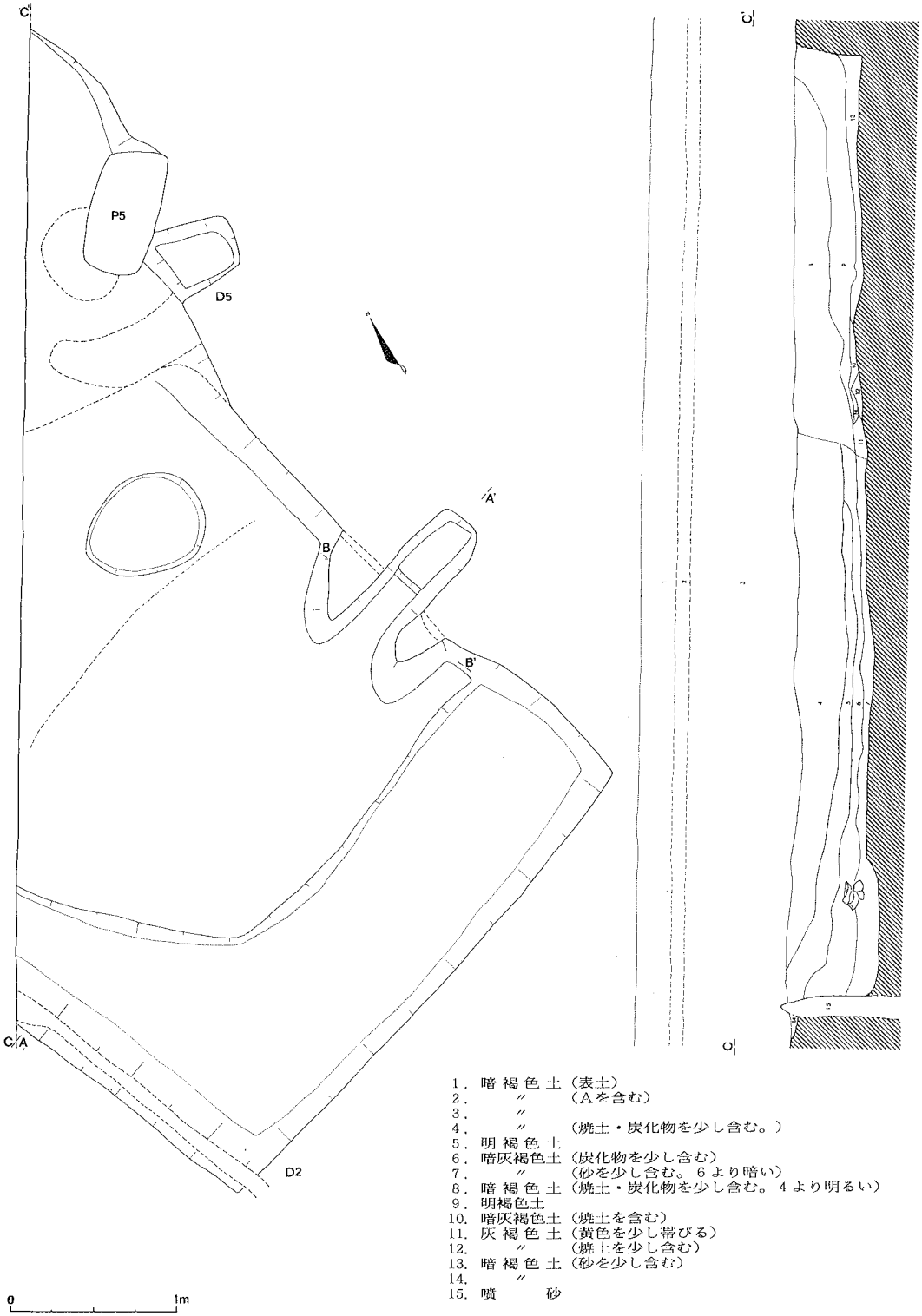
調査区の北端に位置し、第４号住居跡を切っていた。土壙全体の調査ができなかったため規模等は不明であるが、幅1.5mの長方形を呈するものと思われる。深さは現地表面から約130㎝、確認面から約60㎝で、壁面はやや斜めに立ち上がっていた。

○第４号土壙（第５図）

調査区の北端に位置する。0.45×0.3mの長円形を呈し、確認面からの深さは約55㎝であった。壁中位に段が認められた。

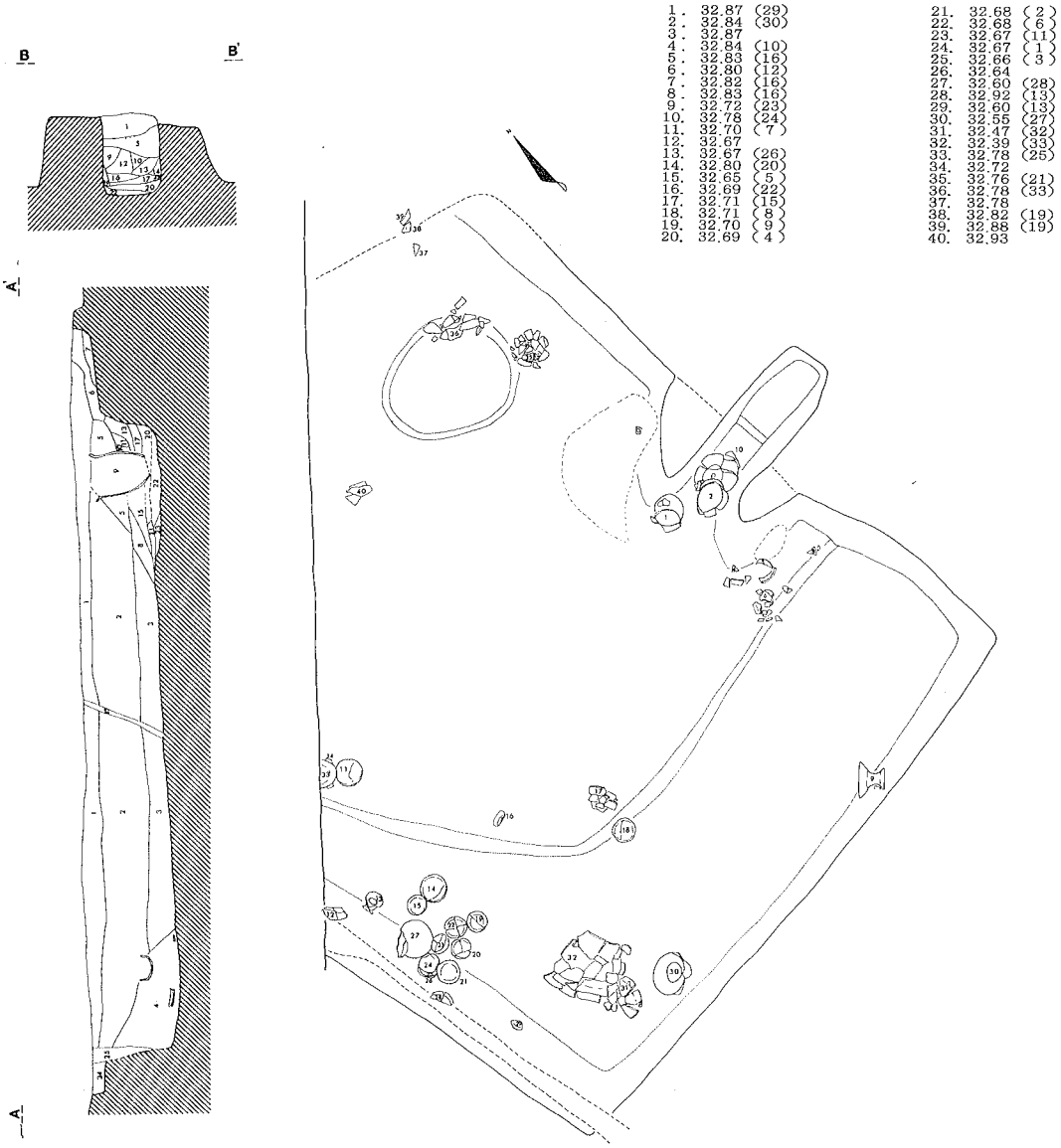
○第５号土壙（第10図）

調査区の北西部に位置し、第５号住居跡を切って作られた極めて特異な遺構である。0.8×0.4mの長方形を呈し、深さは約45㎝で、壁面は斜めに立ち上がり、底面はややすぼまった状態になっていた。壁面はかなりよく焼けており、確認面では、幅約２㎝の焼土の帯が巡っている状態で、覆土中には極めて多量の焼土とともに炭化物・獣骨が含まれていた。底面に長さ約25㎝ほどの煉瓦状の物質があった。



1．暗褐色土（表土）
2．〃（Aを含む）
3．〃
4．〃（焼土・炭化物を少し含む。）
5．明褐色土
6．暗灰褐色土（炭化物を少し含む）
7．〃（砂を少し含む。6より暗い）
8．暗褐色土（焼土・炭化物を少し含む。4より明るい）
9．明褐色土
10．暗灰褐色土（焼土を含む）
11．灰褐色土（黄色を少し帯びる）
12．〃（焼土を少し含む）
13．暗褐色土（砂を少し含む）
14．〃
15．噴砂

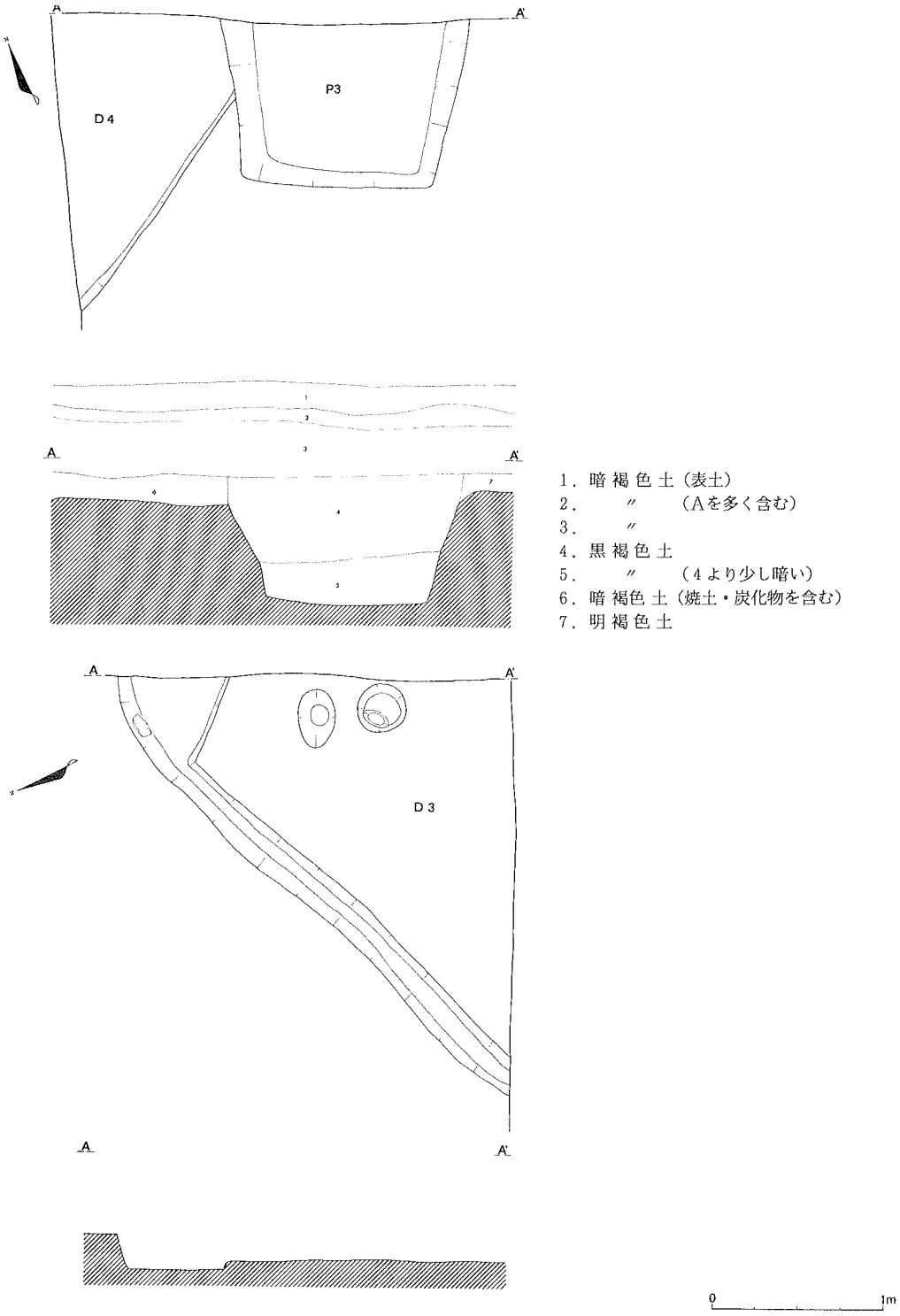
第7図　第2号住居跡実測図（1／40）



1．暗 褐 色 土
2．暗 褐 色 土（焼土・炭化物を少し含む）
3．明 褐 色 土（やや砂っぽい）
4．明 褐 色 土（砂を含む。3より暗い）
5．明 褐 色 土（焼土・炭化物を少し含む。4より暗く、少し灰色）
6．明灰褐色土（焼土ブロックを含む）
7．明灰褐色土
8．灰 褐 色 土（焼土・炭化物を少し含む）
9．暗 褐 色 土（焼土を多く含む）
10．明 褐 色 土（焼土を含む）
11．明灰褐色土
12．暗 褐 色 土（焼土を少し含む）
13．暗 褐 色 土（焼土ブロックを多く含む）
14．明 褐 色 土
15．褐　色　土
16．明 褐 色 土（焼土を多く含む）
17．灰 褐 色 土（灰を多量に、焼土を少し含む）
18．明灰褐色土（灰を含む）
19．明 褐 色 土（焼土ブロックを含む）
20．灰 褐 色 土（焼土を少し含む）
21．灰　色　土（灰層）
22．暗 褐 色 土（焼土・炭化物・灰を少し、砂を多く含む）
23．赤 褐 色 土（焼土粒子・ブロックを多く含む）
24．暗 褐 色 土（1より明るい）
25．噴　　砂

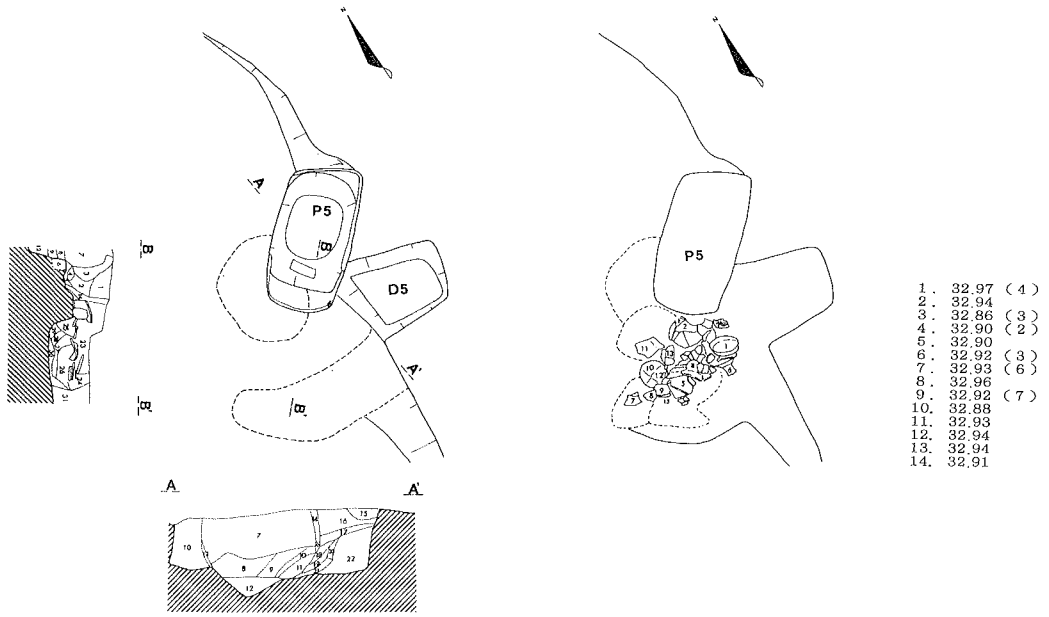
0 1m

第8図　第2号住居跡遺物出土状態（1／40）



1．暗 褐 色 土（表土）
2．　〃　（Aを多く含む）
3．　〃
4．黒 褐 色 土
5．　〃　（4より少し暗い）
6．暗 褐色 土（焼土・炭化物を含む）
7．明 褐 色 土

第9図　第3号・第4号住居跡、第3号土壙実測図（1／40）



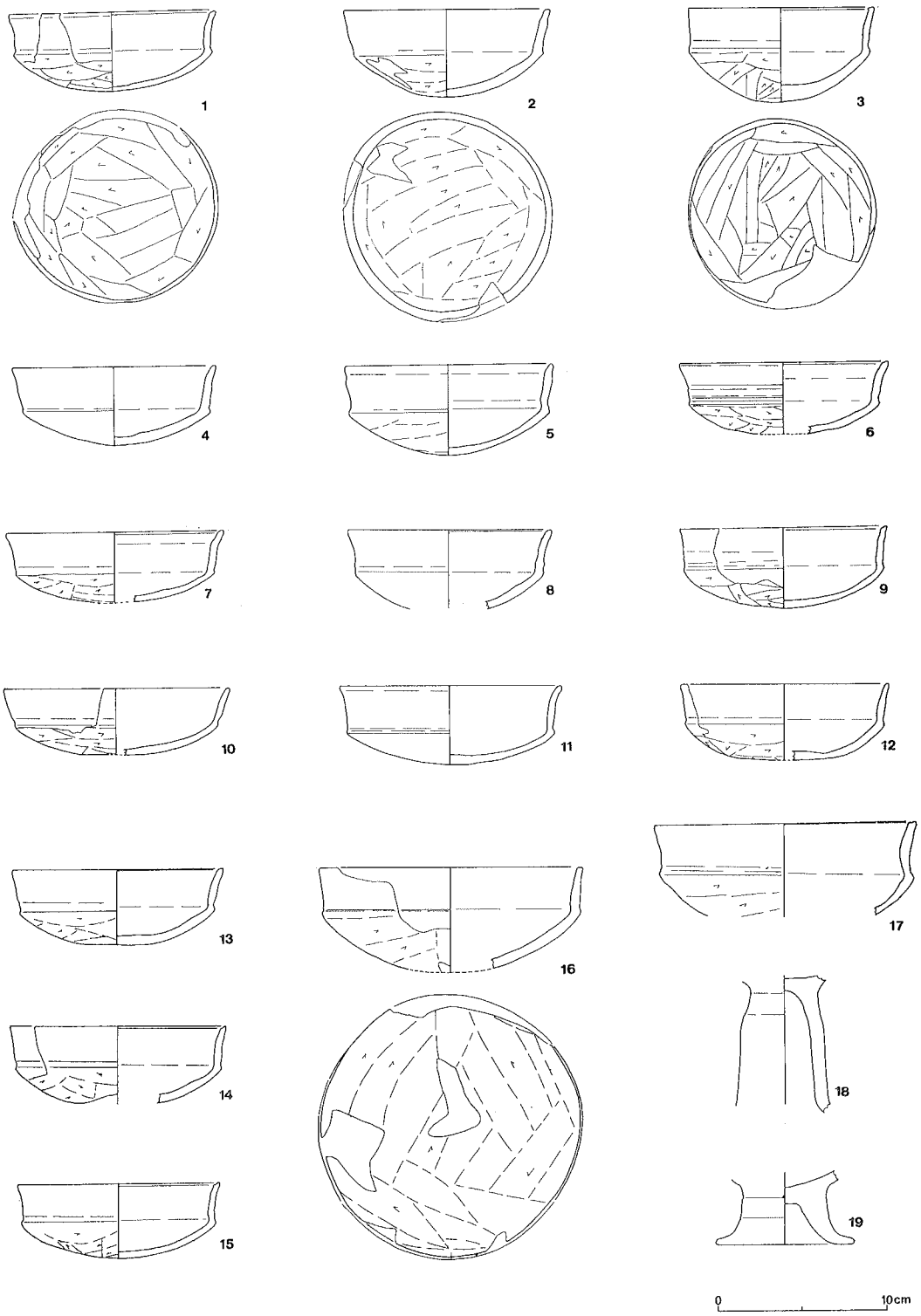
1．暗 褐 色 土（焼土・炭化物を含む）
2．暗 褐 色 土（焼土・炭化物を多く含む。しまり悪く１より暗い）
3．暗 褐 色 土（焼土・炭化物を多く、骨を少し含む）
4．暗 褐 色 土（炭化物を多量に、灰・骨を少し含む）
5．明 褐 色 土（焼土・炭を少し含む）
6．暗灰褐色土（炭化物・灰を含む。骨を多く含む）
7．明 褐 色 土（焼土粒子・炭化物・骨を含む）
8．明 褐 色 土（焼土ブロックを含む）
9．明黄褐色土（炭化物を少し含む）
10. 炭化物
11. 明灰褐色土（焼土を少し、炭化物・灰を含む）
12. 煉瓦状ブロック
13. 焼土ブロック（エンジ色）
14. 焼土ブロック（13よりエンジ色濃い）
15. 明 褐 色 土（焼土ブロックを含む）
16. 明 褐 色 土（11より明るい）
17. 灰 褐 色 土（焼土・ブロックを含む）
18. 明 褐 色 土（焼土を少し含む）
19. 明 褐 色 土（焼土・炭化物を少し含む）
20. 灰 褐 色 土（焼土を少し含む）
21. 明 褐 色 土（焼土を少し含む。19より明るい）
22. 明黄灰色土（カマド袖）
23. 明 褐 色 土（焼土を少し含む）
24. 焼土ブロック（朱色。カマド内壁）
25. 焼土ブロック（朱色）
26. 明 灰 色 土（焼土・炭化物・灰を含む）
27. 明 褐 色 土（焼土粒子を含む）
28. 灰　色　土（炭化物・灰を含む）
29. 明橙褐色土（焼土を含む）
30. 明 褐 色 土
31. 明橙褐色土（カマド袖。火熱による変化）
32. 暗 褐 色 土（第５号住居跡覆土）

0 1m

第10図　第５号住居跡・第５号土壙実測図（１／40）

○第１号住居跡出土遺物（第11図１～19）　※全て土師器

番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　徴	残存
1	坏	12.3	4.8		偏平な形態。器面やや軟質。底面の約１／３に黒斑焼成良、軽質。ＹＷ。	80%
2	坏	12.4	5.3		口唇部上面平坦で一部に沈線。器面軟質で少し摩滅内面は丁寧なナデで、体部内面にヘラ状工具の使用痕あり。体～底部の大半は黒斑。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。焼成やや不良、軽質。ＬＯ。	90%
3	坏	11.3	5.8		内面は丁寧なナデ、底内部にはヘラ状工具痕あり。底外面に黒斑。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない焼成良好。ＬＢ。	80%
4	坏	12.2	4.8		体部内面に指の押圧調整痕。器面軟質で摩滅著しい体部に亀裂あり。胎土酸化鉄多く含む。焼成やや不良、軽質。ＬＯＢ。	完形
5	坏	12.4	5.5		器面軟質で摩滅著しい。体～底部外面黒斑。焼成やや不良、軽質。ＬＯＢ。	完形
6	坏	12.6	4.3		細かく割れていたもの。口縁部外面下位に沈線。内面丁寧なナデ。体～底面・口縁の一部に黒斑。胎土黒色雲母粒子少ない。ＤＢ。	80%
7	坏	(12.0)	4.2		偏平な形態。体部内面に指の押圧調整痕。焼成良、軽質。ＹＷ。	30%
8	坏	(12.5)	4.3		体部内面指の押圧調整痕あり。器面軟軽質で摩滅著しい。体部外面のヘラ削り不明瞭。胎土酸化鉄多く含む。焼成良、軽質。ＬＯ。	30%
9	坏	(12.5)	4.9		口唇部上面平坦で沈線あり。底面の６～７割を黒斑が覆う。細かい破片の復元。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。ＹＷ。	30%
10	坏	(13.5)	4.0		器面少し摩滅。底面はほとんど黒斑が覆う。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。焼成良、やや軽質。ＹＷ。	20%
11	坏	(13.5)	4.8		体～底部外面の50%以上に黒斑。ＹＷ。	30%
12	坏	(12.5)	4.6		体部内面に指の押圧調整痕。底～体部外面に黒斑。器面少し摩滅。焼成やや不良、軽質。ＹＷ。	40%
13	坏	(12.5)	4.6		口唇部上面平坦。底内面に指の押圧調整痕。内面丁寧なナデ。外面少し摩滅。底外面に黒斑。焼成良好軽質。ＹＷ。	60%
14	坏	(13.0)	4.8		口唇部上内面に沈線。内面丁寧なナデ。外面少し摩滅、ヘラ削りは不明瞭。焼成良、軽質。ＹＢ～ＬＢ	30%
15	坏	(12.0)	4.5		口唇部上内面に沈線。内面丁寧なナデ。体～底部外面は黒斑が覆う。焼成良、軽質。ＯＢ～ＬＢ。	40%
16	大型坏	(16.0)	6.2		口唇部上面平坦で沈線あり。器面軟質で摩滅著しい胎土酸化鉄多く含む。焼成やや不良、軽質。Ｏ～ＯＢ。	70%
17	大型坏	15.8			口唇部上面平坦で沈線あり。口縁部は完存しているが体部は大半を欠損。焼成良好。ＯＢ。	60%

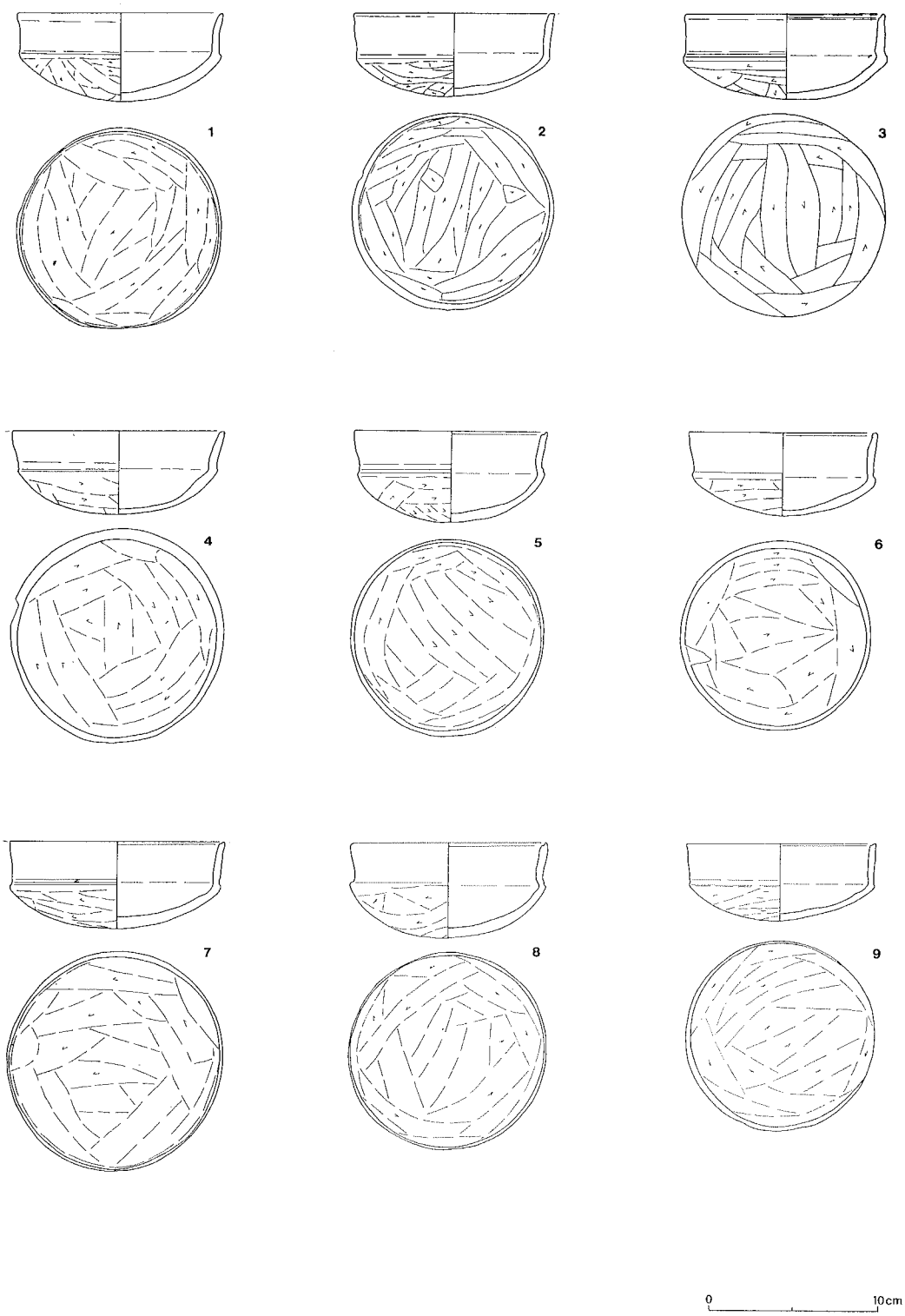


第11図　第１号住居跡出土遺物（１／４）

番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　　徴	残存
18	高坏				比較的高い筒状の脚部。内面丁寧な調整。器面摩滅ＬＯ。	
19	高坏				極めて低い脚部。裾は少しめくれるように広がる。ＬＯ。	

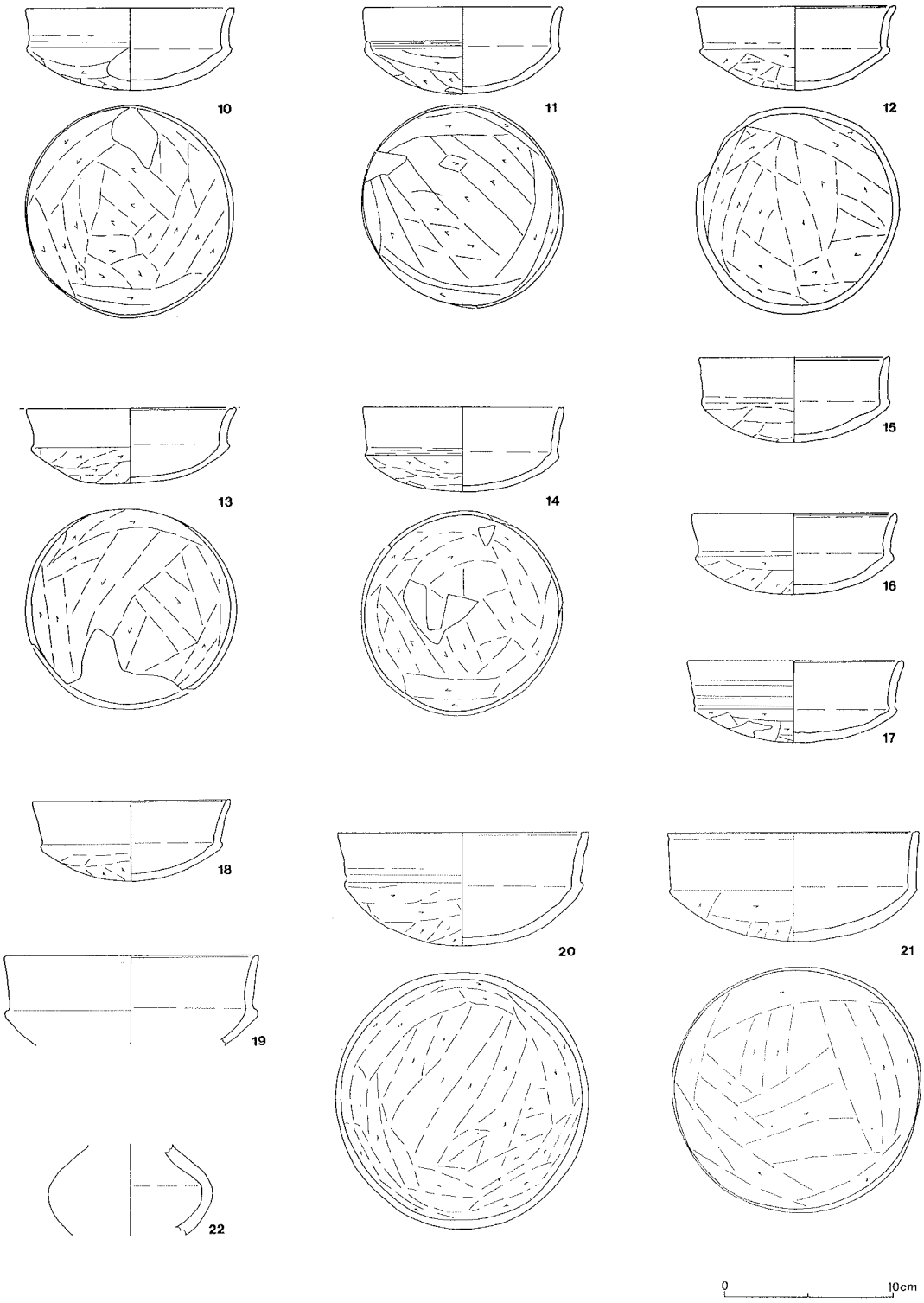
○第２号住居跡出土遺物（第12図１～第15図34）　※全て土師器

番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　　徴	残存
1	坏	12.5	5.4		内面丁寧な調整（指の押圧の後ナデか）。体部外面ヘラ削りやや粗い。体～底部外面に黒斑、焼成良好ＹＷ～ＬＯ。	完形
2	坏	12.0	5.1		口唇部上面平坦で一部に沈線。内面丁寧なナデ、底中央少し凹む。口縁～体部外面に亀裂１カ所。焼成良好。Ｏ。	完形
3	坏	12.4	5.1		口唇部内面・稜外面に沈線。全体に器肉厚く比較的硬質。内面丁寧なナデ。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。焼成良好。ＬＤ～ＹＷ。	90%
4	坏	12.8	5.1		口唇部上面平坦で一部に沈線。器面軟質で摩滅著しい。底～体部の約１／２に黒斑状に変色。焼成不良。軽質。Ｏ。	完形
5	坏	11.5	5.4		口唇部上面平坦で一部に沈線。何面中央少し凹む。器面軟質で摩滅著しい。黒斑なく、破損もない。焼成良、軽質。Ｏ。	完形
6	坏	11.4	5.0		器面少し摩滅。内面丁寧なナデ。底面に黒斑。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。ＤＯＢ。	完形
7	坏	13.0	5.3		カマド内出土。口唇部上面平坦で沈線。体部内面に指の押圧痕・ヘラ状工具のナデ痕。体～底部の約１／２に黒斑。器面少し摩滅。部分的に細かく破損。焼成良、やや硬質。ＬＯ。	完形
8	坏	11.8	5.8		口唇部内面に沈線。内面丁寧なナデ。外面少し摩滅黒斑なく、内面に油煙状の黒色物質が斑点状に付着。胎土黒色雲母粒子少ない。焼成良好。ＯＢ	完形
9	坏	11.4	4.7		口唇部上面平坦。器面軟質で少し摩滅。体～底部外面に黒斑。歪んだための亀裂あり。焼成良、やや軽質。ＬＯ。	完形
10	坏	12.5	5.0		口唇部上面平坦で沈線。体部器肉厚く外面は回転させながらのヘラ削り明瞭。内面丁寧なナデ。焼成良好。ＬＢ～ＬＯＢ。	90%以上
11	坏	12.0	5.3		偏平な形態。口唇部上面平坦で一部に沈線。体部内面少し凹み、一部に亀裂。焼成良好。Ｏ。	90%
12	坏	12.0	5.1		口唇部上面平坦で一部に沈線。稜直下に小黒斑。器面摩滅。細かく破損。焼成不良、軽質。ＹＷ～ＬＯ	90%以上

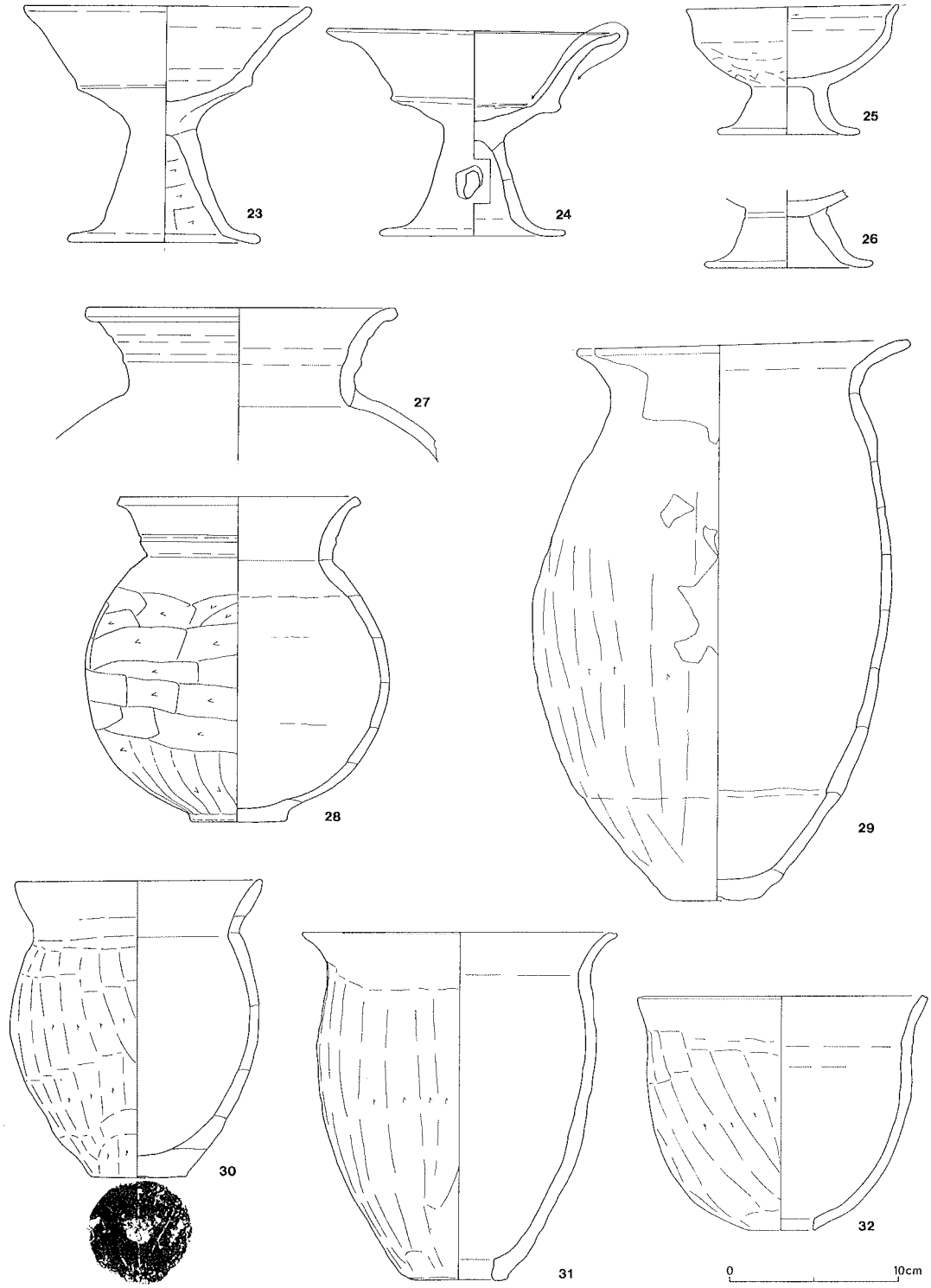


第12図　第２号住居跡出土遺物(1)（１／４）

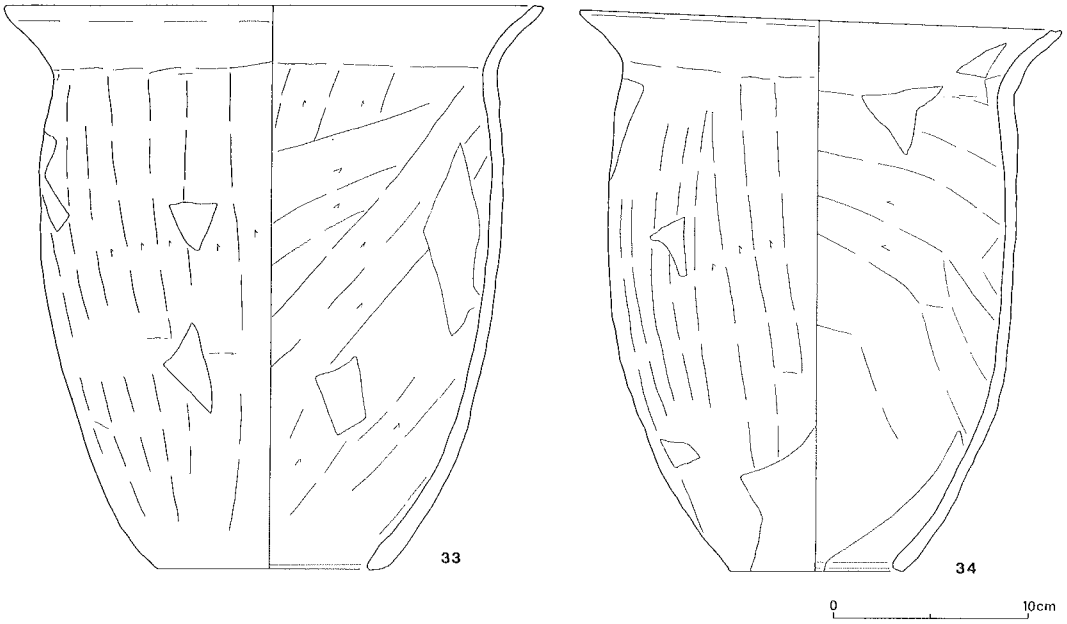
番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　　徴	残存
13	坏	12.7	4.6		内面丁寧なナデ。器面少し摩滅。底外面灰色に変色胎土酸化鉄粒子多い。焼成良、やや軽質。O。	80%
14	坏	12.2	5.2		口唇部上面平坦で沈線。内面丁寧なナデ。器面摩滅底面に小黒斑。焼成良、軽質。LO～LOB。	70%
15	坏	11.8	5.0		口唇部上面平坦。脆い感じで細かく破損。器面摩滅調整痕不明瞭。焼成不良。O～OB。	90%
16	坏	12.4	5.0		口唇部内面に沈線。底～体部外面に黒斑。OB。	70%
17	坏	(13.0)	5.0		口縁部外面中位・稜上位に沈線。底面大半黒斑。比較的平坦な底内面も黒色化。器面やや軽質。焼成良やや軽質。O～OB。	50%
18	坏	(12.0)	4.7		内面丁寧なナデ。外面少し摩滅。DB。	60%
19	坏	(13.0)	5.5		口唇部上面平坦。器面摩滅著しい。調整痕不明瞭。焼成不良、軽質。O。	破片
20	大型坏	15.3	6.9		口唇部上面平坦。内面丁寧なナデ。黒斑・亀裂等なし。O。	完形
21	大型坏	15.0	6.7		口唇部上面平坦で一部に沈線。器面少し摩滅。全体は比較的細かく破損。OB。	完形
22	小型壷	胴径	10.5		坩または甑型か。内外面とも丁寧なナデ。LO。	破片
23	高坏	17.6	14.4	11.7	やや歪んだ形態。全体の調整は丁寧。坏部を脚部へ接合の後ナデつけ。脚部内面ヘラ削りの後ナデ。坏部下面の一部剥離。胎土精選。焼成良好。OB。	80%
24	高坏	17.7	12.3	10.6	カマド出土。全体に丁寧なナデ。坏部内面・脚部内面ヘラ状工具のナデ痕あり。脚部中位に焼成前の穿孔（不整な長円形）一カ所。坏部に補修部分（乾燥時に生じた亀裂に粘土を補って塗りつけ焼成したもの）あり（図の矢印）。胎土精選。焼成良好。OB	90%
25	高坏	12.8	8.0	8.4	口唇部上面平坦。坏部内面丁寧なナデ。坏体部外面ヘラ削りの後若干のナデ。脚部内面ナデ。裾部外面に絞り目状の痕跡。焼成良好。O。	完形
26	高坏			(10.0)	内外面とも丁寧なナデ。脚部は坏部に貼付。LO。	
27	壷	18.7			頸部に突帯巡る。胴部内面丁寧なナデ。器面摩滅。	
28	壷	(14.5)	20.0	5.8	胴部の一部に黒斑。焼成やや不良。LOB。口縁部外面下位に沈線及び稜。体部球形。底部突出し底面はヘラ削り。内面丁寧なナデで、一部に輪積痕明瞭。底面黒斑が覆う。全体に調整丁寧で器面滑らか。口縁部7割欠損。焼成良好。O。	完形
29	小型甕	14.8	18.1	6.0	胴部外面下位は火熱によりGBに変色。器面丁寧なナデ。外面摩滅。底面は中央が少し凹んでわずかに輪台状、木葉痕あり。胎土大きめの砂粒多く含む。焼成良、ややもろい。LO～GB。	90%以上
30	甕	(20.0)	34.0	5.5	カマド内出土。かなり偏平な形態（小破片の接合復元のためか）。器面摩滅。調整痕不明瞭。底面はナデられ、外側から中央へのナデつけによりわずかに輪台状。胴部の一部に黒斑。LOB。	80%



第13図　第２号住居跡出土遺物(2)（１／４）



第14図　第２号住居跡出土遺物(3)（１／４）



第15図　第２号住居跡出土遺物(4)（１／４）

番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　徴	残存
31	甑	(19.0)	21.2	6.0	口唇部上面平坦。胴部外面ヘラ削りだが器面滑らか内面丁寧なナデ。底の孔は下面・内側とも面取り。胎土黒色雲母粒子・白色粒子少ない。焼成良好。ＬＯ～ＬＹＢ。	60%
32	甑	17.6	14.3	4.0	口唇部上面平坦。丁寧にナデられた内面は黒色化。底の孔は内側面を面取り。焼成良好。ＬＯ～Ｏ。	90%
33	甑	27.8	29.8	11.8	口唇部上面平坦。内外面ともヘラナデ。底の孔は下面が平に面取り。焼成良好。ＬＯＢ。	90%以上
34	甑	25.2	28.5	9.0	口唇部上面平坦で沈線。器面は内外面ともヘラナデで比較的滑らか。外面はヘラナデ（削り）の際の横位のひっかかり傷が簾状。底の孔は下面・内側面とも軽い面取り。胴部外面の一部に黒斑。焼成良好。ＬＯ。	90%

○第４号住居跡出土遺物（第16図１）　※全て土師器

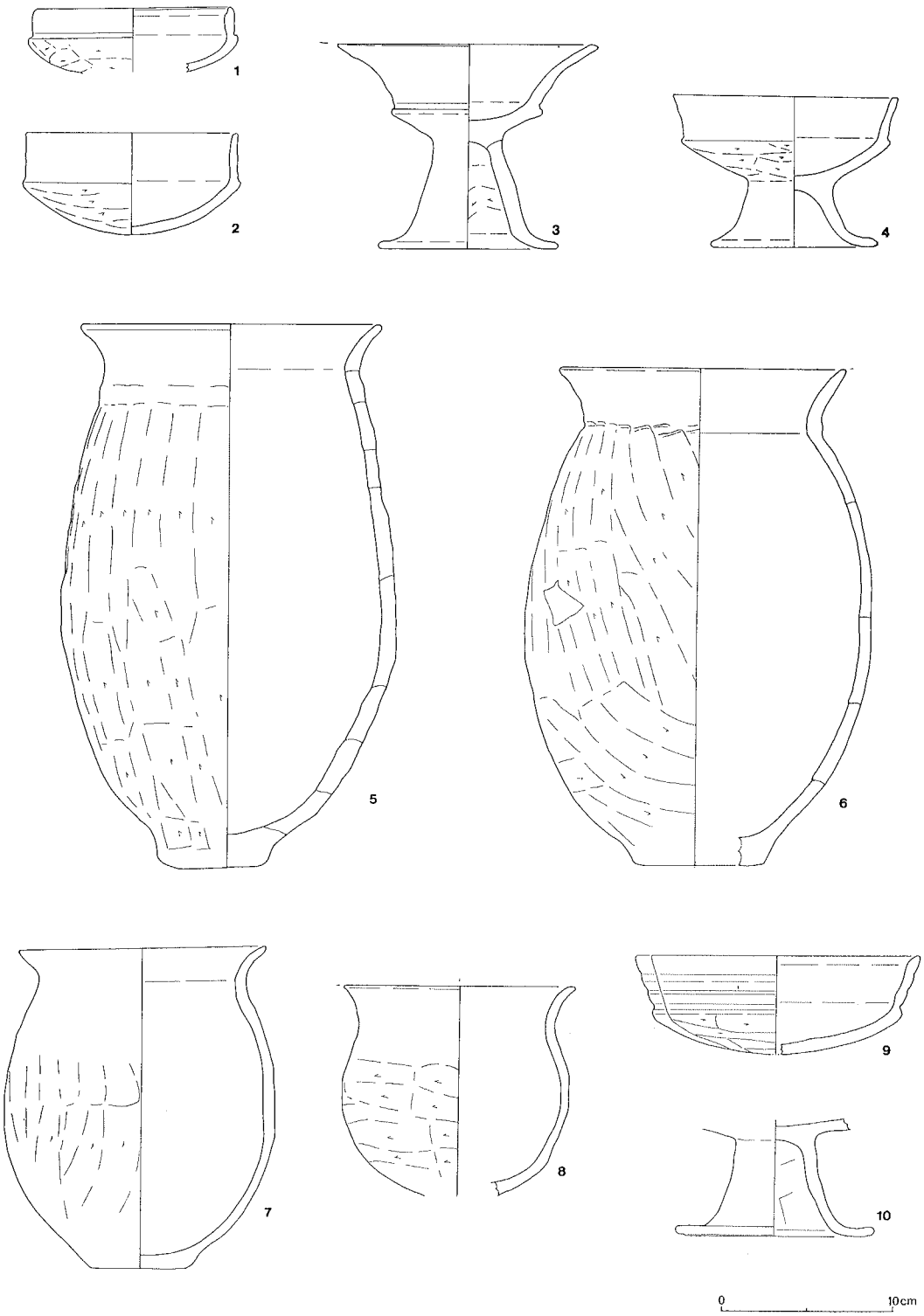
番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　徴	残存
1	坏	(12.0)			口唇部内部に浅い沈線。内面は丁寧なナデ。胎土酸化鉄粒子少ない。焼成良好。ＬＧＢ。	破片

○第５号住居跡出土遺物（第16図２～８）　※全て土師器

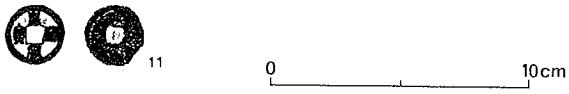
番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　徴	残存
2	坏	12.8	6.0		内面丁寧なナデ。器面軟質で摩滅。焼成やや不良、軽質。O～LOB。	70%
3	高坏	15.6	12.3	10.6	口唇部上面平坦。坏部稜は直上に沈線を伴い明瞭、内面丁寧なナデ、体部外面ヘラ削りの後押圧及びナデ。脚部内面ヘラ削りの後若干のナデ。焼成良好。DB～YW。	90%
4	高坏	13.4	8.8	9.8	口唇部上面平坦。坏部内面極めて丁寧なナデ。坏体部外面ヘラ削り。脚部内面ヘラナデの後指ナデ。胎土不透明な黒色粒子を斑点状に含み、黒色雲母粒子・白色粒子少ない。焼成良好。LO。	90%以上
5	甕	18.0	33.0	6.4	胴部外面少し摩滅。内面丁寧なナデ。底部は突出して厚く、底面は丁寧にナデられている。頸～胴部外面の一部に黒斑。胎土大きめの砂粒多く含み、白色粒子少ない。焼成良好。LYGB。	90%以上
6	甕	17.2	30.0	(8.0)	胴部内面極めて丁寧なナデ。胴部外面中位の一部に黒斑。底部は大半を欠損しているが、底面はナデ調整で黒色化。OB。	90%
7	小型甕	14.8	19.5	5.8	胴部外面中～上位器面比較的滑らか、下位は火熱により器面ぼろぼろで細かく破損。内面は丁寧なナデ底面ヘラ削り。胴部外面下位の一部に黒斑。O。	90%
8	小型甕	13.8	(13.0)		歪んだ形態。口唇部上面平坦。器面摩滅。胴部外面下位火熱により変質変色し４割方に炭化物付着。内面丁寧なナデ。焼成不良、軽質。LB～LGB。	80%

○その他の出土遺物（第16図９・10、第17図11）　※全て土師器

番号	器　種	口径cm	器高cm	底径cm	特　徴	残存
9	坏	(17.0)	(6.0)		表面採集。口縁部外面に２条、稜直上に１条の沈線内面極めて丁寧なナデ。胎土酸化鉄粒子少ない。焼成良好。LGB。	20%
10	高坏		(12.0)		表面採集。外面丁寧なナデ。内面横位のヘラナデ。焼成良好。LO。	脚部70%
11	銅銭	径2.3			皇宋通宝。１号住上層出土。北宋・初鋳1039年。篆書体。	



第16図　第４号・第５号住居跡出土遺物ほか（１／４）



第17図　出土古銭拓影図（1／3）

3．まとめ

今回の第7次発掘調査は、個人の専用住宅建築に伴う発掘調査であったため、調査対象が約60㎡と極めて狭かったが、5軒の竪穴住居跡が発見されるなど、充分な成果を挙げることができた。

5軒の住居跡のうち、遺構に伴う出土遺物があったのは第1号・第2号・第5号の3軒である。中でも第2住居跡はその80～90％が調査でき、中央に貼床が施され西辺から南辺が段差がついて低くなるといった特殊な構造が確認され、出土土師器もセットとして把握でき、かなり良い状態で残っていた。第1号住居跡はカマド部分の確認ができず、第5号住宅跡は逆にカマドのみが確認され、しかも第2号住居跡と第5号土壙に破壊されるなど、あまり良い状態では調査できなかった。

各住居跡の出土土師器を検討すると、古い順に第5号→第2号→第1号となろう。第5号住居跡からは、極めて遺構の遺存状態が悪かったにもかかわらず、坏・高坏（いわゆる和泉型と鬼高型両方あり）・甕・小型甕などが出土し、それらは第2次発掘調査のA区第1号住居跡出土土師器に類似している。第2号住居跡出土土師器のセットの内容は、坏・大型坏・高坏（和泉型・鬼高型）・壷・甕・小型甕・甑（大型・中型・小型あり）と、器種は豊富である。坏は体部が少し浅くなるとともに口縁部が若干開き、高坏は脚部の退化傾向が、また甕は長胴化傾向が認められるなど、第5号住居跡のものより新しい様相を示している。第1号住居跡出土土師器はほとんど坏ばかりであるが、体部が浅くなり口縁部が開く傾向は一層顕著である。

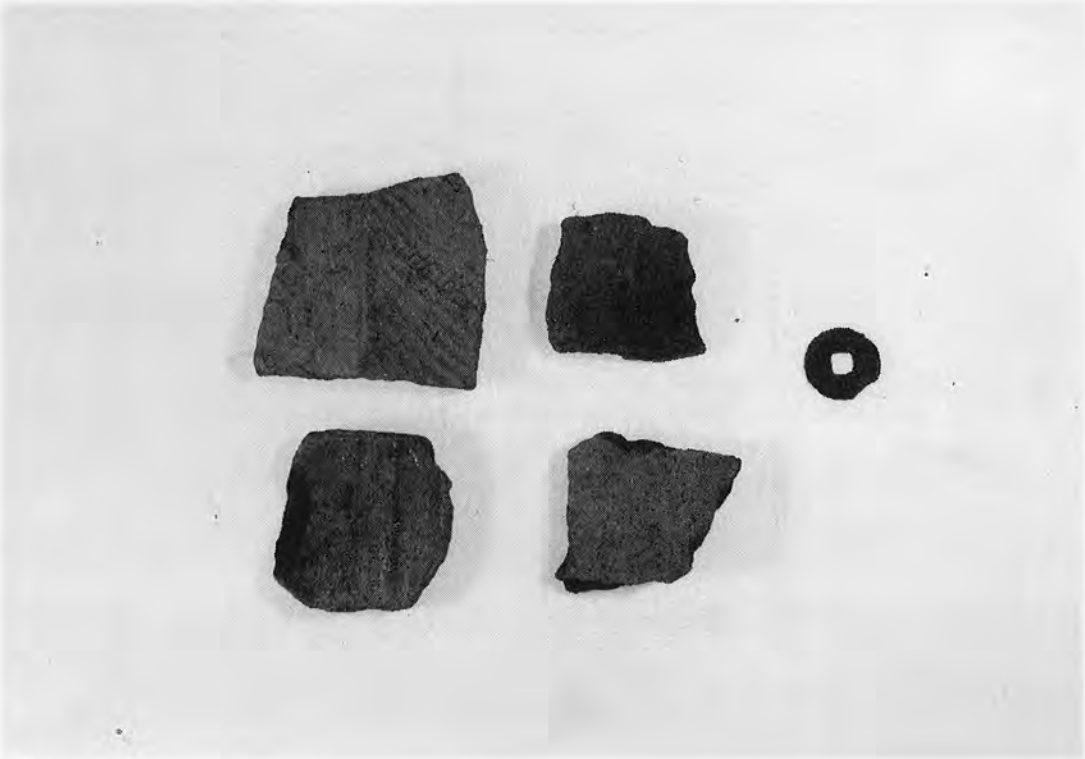
こうした出土土師器の検討により、第1・2・5号住居跡の構築年代を、細かい部分において異論が生じることを承知のうえで推定すると、概ね6世紀半ばを前後する時期が想定されよう。具体的には6世紀第2四半期～第4四半期頃があてられるものと考えられる。約60㎡という極めて狭い場所を対象とした発掘調査でありながら、比較的短期間のうちに構築されたと考えられる住居跡が切り合い関係を含むほどに密集して確認されたことは、6世紀頃の当地域の社会的状況を考察するうえで、多分に示唆に富んだものといえよう。

＜参考文献＞

澤出晃越　深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集　「上敷免遺跡（第2次）・上敷免北遺跡」
深谷市教育委員会　昭和60年3月

写　真　図　版

１．調査風景



２．出土遺物

3．調査区全景（南から）

4．調査風景

5．調査区全景

6．第１号住居跡

図版 4

7．第 2 号住居跡・遺物出土状態(1)

8．第 2 号住居跡・遺物出土状態(2)

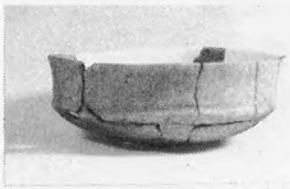
9．第 2 号住居跡・遺物出土状態(3)

10. 第 2 号住居跡・遺物出土状態(4)

図版 6

11. 第 5 号住居跡カマド・第 5 号土壙

12. 第 5 号住居跡カマド遺物出土状態


11—1

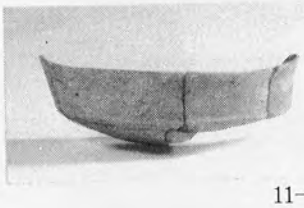
11—2

11—3

11—4

11—5

11—6

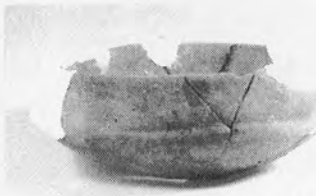

11—7

11—8

11—12

11—13

11—15


11—16

11—17

12—1

12—2

12—3

12—4

12—5

12—6

12—7

12—8

13. 第1号住居跡出土遺物

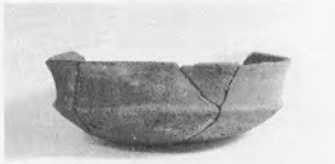
図版 8

12—9

13—10

13—11

13—12


13—13

13—14

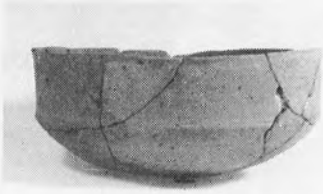
13—15

13—16

13—17

13—18

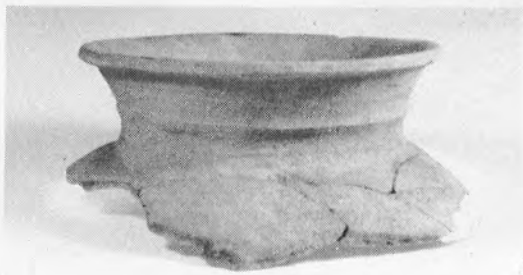
13—20


13—21

14—23

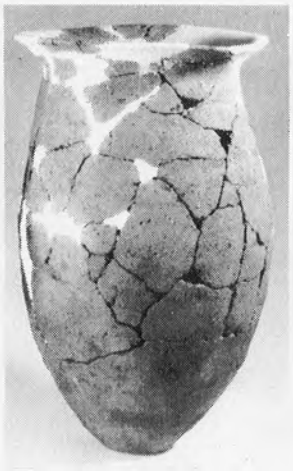
14—24

14—25

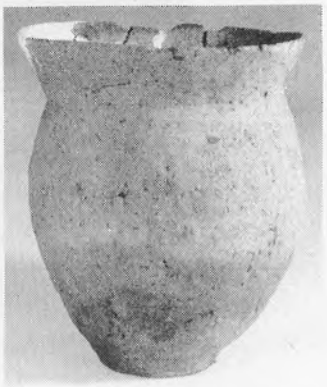

14—27

14. 第 2 号住居跡出土遺物(1)

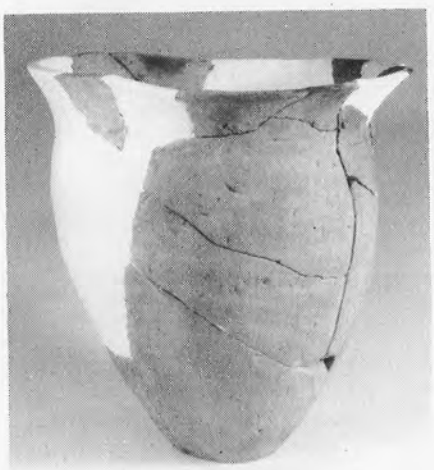
14—28



14—29



14—30



14—31

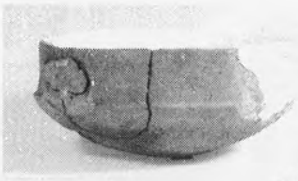
14—32

15—33

15—34

15. 第 2 号住居跡出土遺物(2)

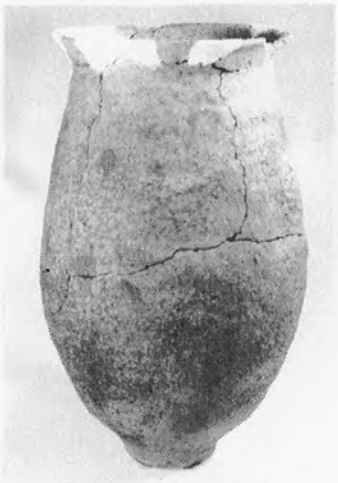
図版10



16—2

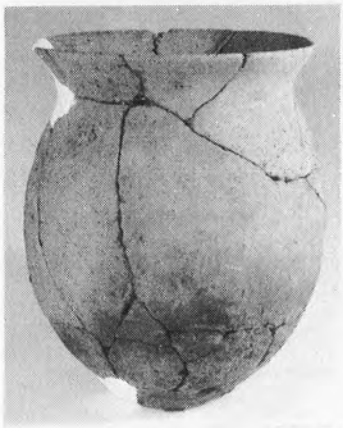
16—4

16—3



16—5

16—6



16—7

16—8

17—1

16. 第5号住居跡出土遺物

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第28集
深　谷　市　内　遺　跡　Ⅲ

印刷　平成３年３月20日
発行　平成３年３月31日
発　行　深　谷　市　教　育　委　員　会
印　刷　大　屋　印　刷　株　式　会　社

「深谷市内遺跡Ⅲ」　正誤表

訂正箇所	誤	正
挿図目次	第７図　第２号住宅跡実測図	第７図　第２号住居跡実測図

○第３図　木の本古墳群第４号墳丘脇部調査区全測図　土層注記

1．黒色土　　（表土）

2．明褐色土　（黒色土、黄色土を含む）

3．明褐色土　（黒色土、黄色土をまだらに含む）

4．黄褐色土

5．暗黄色土